

南蛮の風紀行

12. エンリッケ航海王子

ここで一度、リスボンまで戻りたい。と言うのもリスボンのベレン地区の河岸にそびえる「発見のモニュメント」を見てもらいたいからである。この白亜の巨大なモニュメントは帆船を模してつくられているのだが、その帆船の舳先に胸を張って陣取り、遠い水平線の彼方を見つめている人こそが、大航海時代の幕を切って落とした最大の功労者である。彼の名はエンリッケ航海王子、彼の没後500年祭を記念して、このモニュメントは1960年に建てられた。つまり彼はアルメイダやザビエルの訪日の時代である15世紀より1世紀前の人ということになる。

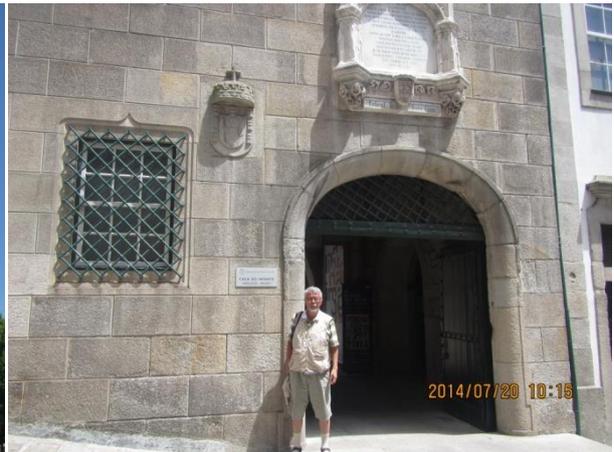


モニュメントの先頭にカラベラ船の模型を抱き、大勢の冒険者達を引き連れて、テージョ河畔から、エンリッケ航海王子は今も水平線の彼方を見続けている。

この人がいなければ、この人の執拗な海への、というより、海の向こうの世界への執着がなければ、15世紀のポルトガルの繁栄はなかった。いやもしかしたら、大航海時代そのものがもっとづ

っと遅れたかも知れない。15世紀の地球はまだ丸くはなかった。世界はアフリカのボハドール岬の西で果て、そこではもうもうと水煙を上げて海が滝のように無限奈落に落ち込んでいたという。

エンリッケ航海王子は1394年に、国王ジョアン1世の第5子（3男）として、ポルトの港のすぐそばで生まれた。エンリッケ航海王子の生家は今、一部が歴史博物館として



公開されている。生家から少し坂を登ると彼の名を冠した広場に突き当たる。そこには彼の銅像が建ち、今もポルトガルの進むべき道を指し示しているかのようだ。

わたしはいつも不思議に思うことがある。それは彼エンリッケが終生「インファンテ」と呼ばれていたということだ。「インファンテ」とは直訳すると「親王」ということで、皇太子ではない王の子どもであればこそ不思議はないのだが、もともと「インファンテ」というポルトガルの単語には「幼児」とか「子ども」という語感が伴う。66歳で亡くなった彼を呼ぶ「敬称」としてはふさわしいとは思えないのだ。



当時の最新鋭の外航船であるキャラック船（ナウ船）。この絵では船の構造を見せるためか、喫水線から下の部分も描き込まれている。

彼は26歳で父の後を継いでキリスト教騎士団の最高指導者（グラン・メストレ＝グランド・マスター）に就任しているし、父によりヴィゼウ公にも封じられている。確かに彼は生涯独身を通したが、幼少期ならともかくグラン・メストレ（騎士団長）とかプリンシペ（大公）と呼ばれてしかるべきではないだろうか。

現地に行って見て感じたことは、それだけポルトガル国民が彼を愛し、親しみを感じていたのではないかということだ。日本でも時代劇などで、けっこう老けた主人公が「若」と呼ばれているのと同じくしている

感覚なのかも知れない。

彼はその死後に航海王子という称号を得ているが、21歳で父王とともにジブラルタルを渡ったアフリカ地中海沿岸のセウタのイスラム勢力を攻めた時以外に、海に出たという記録は見当たらない。現在ポルトガル領になっているマデイラ島（1419年発見）やアゾレス諸島（1427年発見）の発見によって、後のコロンブスの西インド諸島到達の道を切り開いた功績や、ボハドル岬の西南方で世界が終っているわけではない事の発見によって、全ての冒険的航海者を自縛から解放した功績も、彼はその探検航海を命じただけである。それでも実際の発見者よりも彼の方が有名になったのは、彼が立案者でありスポンサーであったからだろう。例えて言うなら舞台役者よりも劇作家であったシェイクスピアの方が名を残したことと同じなのかもしれない。

エンリケ航海王子がポルトに生まれ育ったことは、彼の事績を考える上で最も重要なことだと言える。大航海時代が始まる前からポルトは造船や海運の基地として繁栄していた。彼も幼い時から船材や後にポートワインの樽の材料となるオークの製材や、造船所での船の形が出来上がっていく様子、出来上がった船の出航の様子や、様々な物資を満載して入港して来る船、それを迎える人々の歓声、荷揚された物資、どれをとっても彼の海の彼方への好奇心と未来願望を募らせなかったものはないだろう。



河岸栈橋と呼ばれる岸壁は今では観光客とそれを目当ての商人達やレストランで賑わっている。既に報告したように岸壁はドゥーロ川に面しており、当時も今も木造船をフナクイムシから持ってきている。かつてのポートワインの樽を本船に運ぶための独特の形をした船は復元されて、観光客を乗せてくれる。わたしもこれに乗って、ポルトの町を水上から眺めることにした。



船は一度ドゥーロ川を遡り、ドン・ルイス橋、インファンテ（親王＝エンリッケ航海王子）橋をくぐり、さらに鉄道橋を二つくぐってから、今度は河口目指して下って行く。岸壁を素通りしてしばらくすると、アラビダ橋と言うモダンな端をくぐり、広々とした河口に出た。冒険商人たちを乗せた多くの交易船が、ここから出ていき、ある時は香辛料などの交易商品を満載にして、又ある時は嵐などで傷ついた船体を

修理するために戻ってきたのだろう。

ただし、エンリッケ航海王子自身はここを基地にしていたわけではない。ポルトガルと言うよりはユーラシア大陸のもう一つの西の果て、正確には南西端であるサン・ヴィセンテ岬のサグレスと言う町が彼の基地であり、彼が創設した世界初の航海学校のあったところである。サグレスはエンリッケ航海王子にちなんでインファンテ村とも呼ばれている。22歳の時にサグレスに移り生んで以来、彼は66歳で亡くなるまでそこに住んだ。

長兄が若くして死んだ時も、次兄と共にまだ6歳でしかなかった長兄の長男を即位させ、摂政となった次兄をよく補佐している。また彼は終生独身だったという。キリスト教騎士団の最高指導者として、その聖職に身をささげていたのだ。それらのこともまた、今に至るまで国民的英雄としての彼の人気の理由なのだろう。